

中学生の本来感の学年差と性差

The grade and gender differences of Sense of Authenticity of junior high school students.

折 笠 国 康*

Kuniyasu ORIKASA

庄 司 一 子**

Ichiko SHOJI

The purpose of this study is to investigate the relationship among grade and gender differences of “sense of authenticity”, “sense of superiority”, and “IIKO tendency”. Junior high school students (N = 676) completed a questionnaire.

The results were as follows: The scores on “sense of authenticity”, “sense of superiority” and “IIKO tendency”, were significantly different according to the students’ grade and students’ gender.

Key words : sense of authenticity, grade difference, gender difference

【問題と目的】

中学生の生徒指導上の問題の解決や予防等、中学生の学校生活の文脈の中で自尊感情の育成が大切であるとの見解がある(古荘¹⁾)。自尊感情についての心理学的な研究において、個人の持ち合わせる自尊感情が随伴性自尊感情か本当の自尊感情かによって精神的な健康が左右されることが考えられている(Kernis²⁾)。伊藤・小玉³⁾は本当の自尊感情を自分自身を自分らしく感じられる感覚である本来感として取り上げ、大学生における様々な適応について明らかにした。こうしたことから中学生の学校生活の文脈での自尊感情も本当の自尊感情である本来感を扱うことが望ましいと考えられる。

伊藤・川崎・小玉⁴⁾は随伴性自尊感情の指標として優越感を、本当の自尊感情の指標として本来感を取り上げ、また優越感と本来感の両方を包含する全体的自尊感情を抽象的な概念として位置付けている。つまり、優越感と本来感の片方だけを持つのではなく、両者のバランスを発達段階や個人の特性により変化させながら内外の適応に影響を与えていると考えられる。しかし、中学生における本来感の発達や個人が持ち合わせる本来感と優越感のバランス、本当の自分つまり自分自身を自分らしく感じられる感覚である本来感とは対極的な概念であると考えられるいい子傾向とのバランスの状態を区別して、学校適応やその他の変数との関連を検討した実証的研究は現段階では見当たらない。また、本来感を高くもつに至らないにもかかわらず、

※ 幼児教育学科 ※※ 筑波大学大学院人間総合科学研究科

ある程度の適応を維持できている人々の心理過程について理解する視点を示す研究も行われていない。そこで、今後の本来感研究において、中学生の本来感の特性について発達的变化に着目して検討することや、本来感と外的な領域における自尊源(伊藤・川崎・小玉⁴⁾)への随伴性や充足感に関わる優越感、自分らしさを抑圧することに関わるいい子傾向との関連を検討し発達的な変化を検討することが必要であると考えられる(折笠・庄司⁵⁾)。具体的には、中学生の持ち合わせる本来感と優越感のバランス状態、本来感といい子傾向とのバランス状態に着目し本来感の発達や特性の変化について検討することが考えられる。

本研究においては、今後の課題となる前述した一連の本来感研究の初めとして、中学生の本来感、優越感、いい子傾向それぞれの因子構造を確認し各因子の学年差と性差について検討し、さらに各尺度間の関連について検討することを目的とする。

【方法】

(1) 調査対象

東北地方X県の公立中学校の1～3年生6学級の生徒287名(男子156名、女子131名;1年生男子55名、1年生女子40名、2年生男子51名、2年生女子58名、3年生男子50名、女子33名)、関東地方Y県の公立中学校の1～3年生6学級の生徒213名(男子93名、女子120名;1年生男子35名、1年生女子38名、2年生男子31名、2年生女子39名、3年生男子27名、女子43名)、九州地方Z県の公立中学校の1～3年生5学級の生徒176名(男子87名、女子89名;1年生男子25名、1年生女子27名、2年生男子27名、2年生女子22名、3年生男子35名、女子40名)の計676名が分析対象であった。有効回答率は97.13%であった。

(2) 調査内容

質問冊子は、①中学生用本来感尺度(折笠・庄司⁶⁾)7項目、②「いい子」傾向尺度(庄司・林田⁷⁾)10項目、③社会的スキル尺度(庄司⁸⁾)22項目、④学校適応感尺度(大久保⁹⁾)20項目、⑤中学生用ハーディネス尺度(稲葉・森・五十嵐¹⁰⁾)10項目、⑥居場所の心理機能尺度(杉本・庄司¹¹⁾)31項目、⑦生徒の教師に対する信頼感尺度(中井¹²⁾)15項目、⑧優越感尺度(小塩¹³⁾)7項目、⑨友達とのつきあい方尺度(落合・佐藤¹⁴⁾)20項目、⑩精神的回復力(小塩・中谷・金子・長峰¹⁵⁾)を尋ねる尺度から構成され、本研究では①、②、⑧の尺度を分析の対象とした。具体的に用いられた質問用紙は以下のとおりである。

①中学生用本来感尺度

伊藤・小玉³⁾により大学生用に作成された「個人が自分らしくあると感じている全般的な感覚を測定する尺度」を基に、折笠・庄司⁶⁾によって作成された尺度である。質問項目は「いつも自分らしくいられる」「人前でもありのままの自分を出せる」「自分を“これでよし”

と感ずることがある」などである。主成分分析の結果では1因子構造が確認されており、5件法で回答を求めた。

②いい子傾向尺度

庄司・林田⁷⁾により作成された主張抑制5項目、他者迎合5項目の2因子を下位尺度とする尺度である。代表的な質問項目は「思っていることを口に出さない」「他の人から気に入られたいと思う」などであり、5件法で回答を求めた。

③社会的スキル尺度

庄司⁸⁾が作成した共感・援助的かかわり14項目、積極的・主張的かかわり11項目、からかい・妨害的かかわり6項目、拒否・無指的かかわり6項目の4因子を下位尺度とする尺度から、各因子の因子負荷量を参考に合計22項目を採用した。代表的な質問項目は「友達が困っていたら助ける」「友達が良くないことをしていたら注意する」「友だちが失敗すると、つい笑ってしまう」「友だちとの約束を守らない」などであり、5件法で回答を求めた。

④学校適応感尺度

大久保⁹⁾が作成した居心地の良さの感覚11項目、課題・目的の存在7項目、被信頼・受容感6項目、劣等感の無さ6項目の4因子を下位尺度とする尺度から、各因子の因子負荷量を参考に合計20項目を採用した。代表的な質問項目は「周囲となじめている」「やるべき目的がある」「周りから頼られていると感じる」「周りに迷惑をかけていると感じる」などであり、5件法で回答を求めた。

⑤中学生用ハーディネス尺度

稲葉・森・五十嵐¹⁰⁾が作成したポジティブ思考6項目、コントロール可能感4項目の2因子を下位尺度とする尺度である。代表的な質問項目は「生きがいを感じているものがあります」「幸福になるか不幸になるかは、偶然によって決まると思います」などであり、5件法で回答を求めた。

⑥居場所の心理機能尺度

杉本・庄司¹¹⁾が作成した被受容感7項目、精神的安定10項目、行動の自由6項目、思考・内省4項目、自己肯定感5項目、他者からの自由3項目の6因子を下位尺度とする尺度から、各因子の因子負荷量を参考に合計31項目を採用した。代表的な質問項目は「自分を本当に理解してくれる人がある」「無理をしないでいられる」「自分の好きなことができる」「自分のことについてよく考える」「何かに夢中になれる」「他人のペースに合わせなくていい」などであり、5件法で回答を求めた。

⑦生徒の教師に対する信頼感尺度

中井¹²⁾が作成した安心感11項目、不信10項目、役割期待10項目の3因子を下位尺度とする尺度から、各因子の因子負荷量を参考に合計15項目を採用した。代表的な質問項目は「先生

にならいつでも相談ができると感じる」「先生は自分の考えを押し付けてくると思う」「先生は悪いことは悪いとはっきり言うと思う」などであり、5件法で回答を求めた。

⑧優越感尺度

小塩¹³⁾が作成した自己愛人格目録短縮版の下位尺度である優越感・有能感10項目から、因子負荷量を参考に7項目を採用した。代表的な質問項目は「私は他人より有能な人間であると思う」等であり、5件法で回答を求めた。

⑨友達とのつきあい方尺度

落合・佐藤¹⁴⁾が作成した防衛的13項目、全方向的6項目、自己自信6項目、積極的相互理解4項目、同調4項目、被愛願望2項目の6因子を下位尺度とする尺度から、各因子の因子負荷量を参考に合計20項目を採用した。代表的な質問項目は「友達とは本音で話さないほうが無難だ」「どんな友達とも仲良しでいたい」「友達と意見が対立しても、自信を無くさないで話し合える」「友達と分かり合おうとして傷ついても仕方ない」「みんなと何でも同じでいたい」「みんなから愛されたい」などであり、5件法で回答を求めた。

⑩精神的回復力

小塩・中谷・金子・長峰¹⁵⁾が作成した新奇性追求7項目、感情調整9項目、肯定的な未来志向5項目の3因子を下位尺度とする合計21項目を採用した。代表的な質問項目は「色々なことにチャレンジするのが好きだ」「自分の感情をコントロールできる方だ」「自分の未来にはっきりといいことがあると思う」などであり、5件法で回答を求めた。

(3) 調査時期および実施方法

調査の実施期間は2015年7月～8月。

回答は全て無記名で行われた。成績に関係しないこと、担任や他の教師が中を見ないこと、質問への回答は自由意志であること、調査の趣旨を各中学校の教師から説明してもらい、その後、各教室で担任が質問紙を配布し記入後回収した。回答中に生じる質問に対しては、各学級で担任が対応した。回収に際しては、生徒が回収用の袋を密封し、匿名性の保持に努めた。また、本調査は筑波大学人間総合科学研究科研究倫理委員会の承認を得て行われた。

【結果】

(1) 各尺度の記述統計と因子構造

「中学生用本来感尺度」、「優越感」、「いい子傾向」それぞれの平均および標準偏差を算出し、平均±1SDの値を確認したところ理論上限を超えた項目はなかった(Table 1～3)。中学生用本来感尺度7項目に対して、1次元構造を仮定し主成分分析を行った(Table 4)。その結果から第1主成分は全ての項目が.72以上の負荷量を持ち、単因子としてまとまりのよいことが確

中学生の本来感の学年差と性差

Table 1 中学生用本来感尺度記述統計量

	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M+SD</i>	<i>M-SD</i>
1 自分のやりたいことをやることができる	3.99	0.93	4.92	3.06
2 いつも自分らしくいられる	4.01	1.02	5.02	2.99
3 いつも自分を見失わないでいられる	3.87	1.05	4.92	2.83
4 自分を“これでよし”と感じることがある	3.76	1.06	4.82	2.70
5 これが自分だ、と実感できるものがある	3.84	1.12	4.97	2.72
6 人前でもありのままの自分が出せる	3.67	1.17	4.83	2.50
7 いつでも揺るがない“自分”を持っている	3.64	1.05	4.69	2.59

Table 2 優越感尺度記述統計量

	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M+SD</i>	<i>M-SD</i>
1 私は、周りの人達より、優れた才能を持っていると思う	2.63	1.22	3.85	1.41
2 私は、才能に恵まれた人間であると思う	2.44	1.15	3.59	1.29
3 私は、周りの人達より有能な人間であると思う	2.35	1.12	3.47	1.23
4 私は、周りの人に影響を与えることができるような才能を持っている	2.41	1.11	3.52	1.30
5 私は、周りの人が学ぶだけの値打ちのある長所を持っている	2.42	1.11	3.52	1.31
6 私は、どんなことでも上手くこなせる人間だと思う	2.39	1.11	3.50	1.27
7 周りの人々は、私の才能を認めてくれる	2.79	1.19	3.98	1.60

Table 3 いい子傾向尺度記述統計量

	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M+SD</i>	<i>M-SD</i>
1 思っていることを口に出せない	2.75	1.26	4.01	1.49
2 自分の気持ちをおさえてしまうほうだ	2.88	1.27	4.15	1.61
3 自分の意見をとおそうとするほうではない	3.13	1.22	4.36	1.91
4 自分らしさがないような気がする	2.45	1.20	3.65	1.25
5 人を批判するのは悪いと感じるほうである	3.26	1.25	4.51	2.01
6 他の人から気に入られたいと思う	3.31	1.17	4.48	2.15
7 他の人の顔色や様子が気になるほうである	3.41	1.24	4.65	2.17
8 他の人の期待にこたえるように努力するほうである	3.57	1.14	4.70	2.43
9 自分にとって重要な人には自分のことを分かってほしいと思う	3.79	1.16	4.95	2.64
10 辛い事があっても、がまんする	3.68	1.13	4.82	2.55

認められた。信頼性を検討したところ、 $\alpha = .90$ と十分な内的整合性が確認された。

優越感7項目についても、1次元構造を仮定し主成分分析を行った(Table 5)。その結果から第1主成分は全ての項目が.81以上の負荷量を持ち、単因子としてまとまりのよいことが確認された。信頼性を検討したところ、 $\alpha = .95$ と十分な内的整合性が確認された。

いい子傾向10項目については最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った (Table 6)。その結果、ほぼ先行研究と同様の因子構造が確認されたので、第1因子を「主張抑制」、第2因子を「他者迎合」と先行研究と同様の因子名をつけた。各因子の信頼性を検討したところ、第1因子「主張抑制」で $\alpha = .83$ 、第2因子「他者迎合」で $\alpha = .77$ となり十分な内的整合性のあることが確認された。

Table 4 本来感尺度の主成分分析結果

	負荷量
いつも自分らしくいられる	.84
いつも自分を見失わないでいられる	.83
いつでも揺るがない“自分”を持っている	.80
自分を“これでよし”と感ずることがある	.80
これが自分だ、と実感できるものがある	.79
人前でもありのままの自分が出せる	.77
自分のやりたいことをやることができる	.72
固有値	4.41
寄与率 (%)	62.97
α	.90

Table 5 優越感尺度の主成分分析結果

	負荷量
私は、才能に恵まれた人間であると思う	.91
私は、周りの人が学ぶだけの値打ちのある長所を持っている	.90
私は、周りの人達より有能な人間であると思う	.89
私は、周りの人に影響を与えることができるような才能を持っている	.88
私は、周りの人達より、優れた才能を持っていると思う	.88
私は、どんなことでも上手くこなせる人間だと思う	.87
周りの人々は、私の才能を認めてくれる	.81
固有値	5.40
寄与率 (%)	77.19
α	.95

Table 6 いい子傾向尺度の因子分析結果

	I	II	共通性
第Ⅰ因子：主張抑制 ($\alpha=.83$)			
自分の気持ちをおさえてしまうほうだ	.88	.01	.62
思っていることを口に出せない	.77	.04	.54
自分の意見をとおそうとするほうではない	.68	.05	.43
自分らしさがないような気がする	.63	-.11	.33
第Ⅱ因子：他者迎合 ($\alpha=.77$)			
他の人の期待にこたえるように努力するほうである	-.09	.83	.48
自分にとって重要な人には自分のことを分かってほしいと思う	-.15	.76	.43
他の人から気に入られたいと思う	.00	.60	.35
他の人の顔色や様子が気になるほうである	.25	.55	.39
辛い事があっても、がまんする	.15	.41	.26
因子間相関			
	I	.27	

(2) 中学生用本来感尺度の学年差と性差の検討

中学生用本来感尺度の学年差と性差を検討するため、中学生用本来感尺度の得点を従属変数、学年（1年、2年、3年）と性別（男子・女子）を要因とする2要因分散分析を行った（Table 7）。その結果、学年に有意な主効果（ $F(2,670)=5.52$, $p<.01$ ）が確認された。2年と3年が1年よりも有意に高く、2年が3年よりも高いことが確認された。

(3) 優越感の学年差と性差の検討

優越感の学年差と性差を検討するため、優越感の得点を従属変数、学年（1年、2年、3年）と性別（男子・女子）を要因とする2要因分散分析を行った（Table 8）。その結果、性別に有意な主効果（ $F(1,670)=14.97$, $p<.001$ ）が確認された。男子が女子よりも有意に高いことが確認された。

Table 7 性別×学年ごとの本来感尺度の平均値と2要因分散分析

	男 子			女 子			二要因分散分析		
	1年 (N=115)	2年 (N=109)	3年 (N=111)	1年 (N=105)	2年 (N=119)	3年 (N=117)	性別 F値	学年 F値	交互作用 F値
本来感	3.86 (.91)	4.08 (.89)	3.71 (.80)	3.79 (.85)	3.83 (.76)	3.68 (.77)	3.28	5.52**	1.15

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

Table 8 性別×学年ごとの優越感尺度の平均値と2要因分散分析

	男 子			女 子			二要因分散分析		
	1 年 (N=115)	2 年 (N=109)	3 年 (N=111)	1 年 (N=105)	2 年 (N=119)	3 年 (N=117)	性別 F値	学年 F値	交互作用 F値
優越感	2.59 (1.11)	2.77 (1.00)	2.57 (1.04)	2.44 (1.00)	2.28 (.85)	2.32 (.94)	14.97***	0.43	1.68
							* $p<.05$	** $p<.01$	*** $p<.001$

(4) いい子傾向の学年差と性差の検討

いい子傾向の学年差と性差を検討するため、いい子傾向の得点を従属変数、学年（1年、2年、3年）と性別（男子・女子）を要因とする2要因分散分析を行った（Table 9）。その結果、主張抑制の性別に有意な主効果（ $F(1,670) = 7.19, p < .01$ ）が、他者迎合の性別に有意な主効果（ $F(1,670) = 14.34, p < .001$ ）が確認された。共に女子が男子よりも有意に高いことが確認された。

Table 9 性別×学年ごとのいい子傾向尺度の平均値と2要因分散分析

	男 子			女 子			二要因分散分析		
	1 年 (N=115)	2 年 (N=109)	3 年 (N=111)	1 年 (N=105)	2 年 (N=119)	3 年 (N=117)	性別 F値	学年 F値	交互作用 F値
主張抑制	2.82 (1.07)	2.63 (1.07)	2.64 (.97)	2.94 (1.00)	2.86 (1.00)	2.92 (.90)	7.12**	1.02	0.39
他者迎合	3.49 (.92)	3.46 (.89)	3.34 (.79)	3.66 (.81)	3.68 (.81)	3.68 (.79)	14.34***	0.35	0.6
							* $p<.05$	** $p<.01$	*** $p<.001$

(5) 各尺度間の関連の検討

中学生用本来感尺度、優越感、いい子傾向、それぞれの相関を算出した（Table 10）。その結果、中学生用本来感尺度と優越感、他者迎合とのそれぞれの得点との間には、中程度の正の相関（ $r = .21 \sim .38, p < .001$ ）が認められた。また、中学生用本来感尺度と主張抑制との得点との間には、中程度の負の相関（ $r = -.40, p < .001$ ）が認められた。

優越感と主張抑制との得点の間には、中程度の負の相関（ $r = -.26, p < .001$ ）が認められ、他者迎合との間には有意な相関は確認できなかった。

主張抑制と他者迎合との得点の間には、中程度の正の相関（ $r = .26, p < .001$ ）が認められた。

Table 10 各尺度間の相関係数

	Ⅱ 優越感	Ⅲ 他者迎合	Ⅳ 主張抑制
I 本来感	.38***	.21***	-.40***
Ⅱ 優越感		<i>n.s.</i>	-.26***
Ⅲ 他者迎合			.26***
*** $p < .001$			

【考察】

本研究の目的は、中学生の本来感、優越感、いい子傾向それぞれの因子構造を確認し、その下位尺度得点の学年差・性差を検討することであった。

中学生用本来感尺度に関し主成分分析の結果、1因子性が確認された。これは伊藤・小玉³⁾の大学生用の尺度を基に作成したことや本来感の構成概念から妥当な結果であると考えられる。また、優越感に関しても主成分分析の結果から1因子性が確認されたが、小塩¹³⁾により作成された自己愛人格目録短縮版の下位尺度であることから妥当な結果であると考えられる。いい子傾向に関しては、因子分析の結果、主張抑制と他者迎合の2因子が抽出された。これは庄司・林田⁷⁾とほぼ同様の結果であり妥当なものであると考えられる。

中学生用本来感尺度の学年差・性差の検討結果、交互作用は確認されず学年の主効果が確認された。結果、1年生の本来感が最も低く2年生の本来感が最も高いことが確認された。これは中学生においては、学年を重ねるだけでは本来感が育つということではないことが確認されたと考えられる。1年生から2年生にかけて高まりつつあった本来感を3年生に至るまでに低めてしまう風土が中学校にはあることを示しているとも考えられる。また、「自分のやりたいことをやることができる」「いつも自分を見失わないでいられる」「自分を“これでよし”と感ずることがある」「これが自分だ、と実感できるものがある」「いつでも揺るがない“自分”を持っている」の各項目は、いずれの項目も2年生が3年生よりも有意に得点が高く、3年生においては受験を意識することで本来自分がやりたいことがやりにくい時期であり、また模擬試験の結果などで自信を無くしがちなことの反映であると考えることができる。さらに、2年生で育ちつつあった本来感を管理型学級(河村¹⁶⁾)の割合が多い中学校の風土が3年生までの間に低めてしまうことの表れと考えることができる。本来感全体としては性別の主効果は確認できなかったが、「いつも自分を見失わないでいられる」「自分を“これでよし”と感ずることがある」「いつでも揺るがない“自分”を持っている」の各項目については、いずれの項目も女子よりも男子の得点が高く、これは項目内容から女子が横のつながりを大切にすることや他者からの評価を気にする傾向の表れの結果と考えることができる。

優越感の学年差・性差の検討結果、交互作用は確認されず性別の主効果が確認された。結果、

男子の得点が女子の得点よりも高いことが確認された。これは、先に述べた通り女子は他者評価や他者の目を気にして生活するが、他者より優れていることを重視するというより、他者より劣っていないかを重視しているということを示唆していると考えられる。

いい子傾向の学年差・性差の検討結果、交互作用は確認されず性別の主効果が確認されその結果、主張抑制、他者迎合とも女子の得点が男子の得点よりも高いことが確認された。これは、前述した本来感、優越感の男女差が確認されたことと矛盾するものではなく、むしろ女子の他者評価に価値を置くことがより主張を抑制させ、他者に迎合するいい子としての傾向を促進させると考えることができる。

本来感と優越感、いい子傾向それぞれとの関連性が相関分析によって確認された。本来感と優越感との間には正の中程度の相関 ($r = .38, p < .001$) が確認され、これは伊藤・川崎・小玉⁴⁾の結果と同程度の値 ($r = .43, p < .01$) である。調査対象が大学生と中学生の違いはあるが、個人が持つ全般的自尊感情が優越感と本来感の両方を包含するより抽象的な概念であるという見解を支持するものであると考えられる。本来感と主張抑制の間に負の中程度の相関が確認されたが、自分の存在や意見を主張できることは自分らしさの感覚には必要であると考えれば妥当な結果である。優越感と他者迎合の間には有意な関連は確認できなかったが、本来感と他者迎合の間には正の低い相関が確認された。これは伊藤・小玉³⁾が示唆しているように、本来感とは積極的な他者関係と関連することと符合したものであると考えられる。総じて優越感とは他者とのつながりとは関係なく、本来感とは他者とのつながりとも関係した概念であることが考えられる。自分らしくある感覚は他者が他者らしくあることも大切にするという可能性が考えられる。

【引用文献】

- 1) 古莊純一 2009 日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか 児童精神科医の現場報告 光文社
- 2) Kernis, M.H. 2003 Optimal self-esteem and authenticity : Separating fantasy from reality. *Psychological Inquiry*, 14, 1-26.
- 3) 伊藤正哉・小玉正博 2005 自分らしくある感覚(本来感)とストレス反応、およびその対処行動との関係 健康心理学研究, 18, 24-34.
- 4) 伊藤正哉・川崎直樹・小玉正博 2011 自尊感情の3様態 自尊源の随伴性と充足感からの整理 心理学研究, 81, 560-568.
- 5) 折笠国康・庄司一子 2017 本来感研究の動向と課題 郡山女子大学紀要, 53, 85-98
- 6) 折笠国康・庄司一子 2012 中学生の本来感が学級適応に与える影響 教育カウンセリング研究, 4, 11-20.
- 7) 庄司一子・林田和恵 2003 「いい子」傾向をもつ子どものself-controlと対人関係 教育相談研究, 41, 49-57.
- 8) 庄司一子 幼児・児童のself-controlの発達とその規定要因に関する研究 風間書房
- 9) 大久保智生 2005 青年の学校への適応感とその規定要因ー青年用適応感尺度の作成と学校別の検討ー 教育心理学研究, 53, 307-319
- 10) 稲葉悠・森愛・五十嵐哲也 2011 中学生のハーディネスによるストレス反応低減効果の検討 愛知教育大学保健環境センター紀要, 9, 37-44
- 11) 杉本希映・庄司一子 2006 「居場所」の心理的機能の構造とその発達的变化の研究 教育心理学研究, 54, 289-299
- 12) 中井大介 2012 生徒の教師に対する信頼感に関する研究 風間書房
- 13) 小塩真司 1999 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究, 8, 1-11
- 14) 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65
- 15) 小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治(2002). ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性ー精神的回復力尺度の作成ーカウンセリング研究, 35, 57-65.
- 16) 河村茂雄 2007 データが語る①学校の課題 学力向上・学級の荒れ・いじめを徹底検証 図書文化